

頭国神社を想う紀州漁民と最明寺

絵と文・熱田親憲 題字・熱田泰華

紀伊・房総

くろしお物語

◇13◇

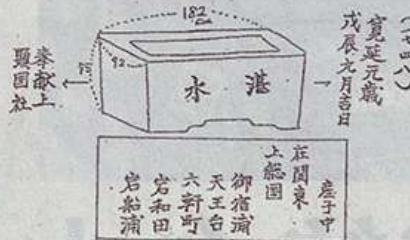
房総半島東側の中ほどにある千葉県御宿町は旧上総国大多喜城の

直轄領が多かったが、紀州漁民によって漁村が開発されたと町長か

ら聞き、確かめるために最明寺の元住職の松崎さんを訪ねた。鎌倉時代に北条時頼が諸国行脚をした際、宿泊されたのが最明寺だと御宿の由来を聞いたのち、紀州漁民の記録を拜見。元禄16年(1703年)11月23日、湯浅・八兵衛(津波の犠牲)。正徳2年(1712年)3月3日、湯浅長三郎納屋佐治兵衛。元文4年(1739年)6月13日湯浅・

た最明寺の元住職の松崎さんを訪ねた。鎌倉時代に北条時頼が諸国行脚をした際、宿泊されたのが最明寺だと御宿の由来を聞いたのち、紀州漁民の記録を拜見。元禄16年(1703年)11月23日、湯浅・八兵衛(津波の犠牲)。正徳2年(1712年)3月3日、湯浅長三郎納屋佐治兵衛。元文4年(1739年)6月13日湯浅・

頭国神社の手水鉢 (湯浅)



手水鉢は頭国神社HPより。左は最明寺



畏れの心手水鉢に

喜兵衛。寛延3年(1750年)11月6日湯浅・六治郎などが目にした絶壁にかかる階段をくの字に下りると、中腹にお堂が建ち、風化しかかった扉を開けると、風化した摩崖仏と、そのレプリカ像が鎮座、問題の手洗い鉢も施主の文字は読めなかった。昔はここに萱葺きの小さな堂があった。住職がいたとのこと。1703(元禄16)年の大津波や鯛の不漁続いた。謙虚であらねばと思